



HEKIYOUKAI

# 辟 雍

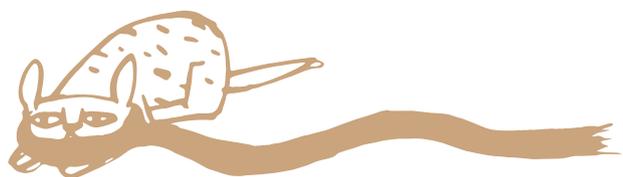


2016年 第13号

東京学芸大学肝臓学会機関誌

## 辟雍第 13 号 目次

「馬淵新会長、抱負を語る」	2
支部便り	4
沿革	11
卒業生から	12
「東京学芸大学・今昔」	24
「飯島同窓会館由来記」	25
平成 28 年度各部報告	26
あとがき	28





学芸大学正門から飯島会館を望む



## 馬淵新会長、抱負を語る

**小澤** 馬淵先生はこの4月より、辟雍会の第4代会長に就任されました。先生は辟雍会とこれまでも深くかかわってこられました。

**馬淵** 辟雍会が発足して間もなく、私は大学の総務担当として会の活動に参加するようになり、その後も引き続き理事や副会長として会の運営に関わってきました。この間、辟雍会は三代にわたる会長の下で、大学や東京同窓会と良好な関係を築き上げ、学生支援事業を徐々に整備し、全国の半数近い道府県の支部を結成するなど、まさに「オール学芸の会」というにふさわしい態様を備えつつあります。そうしたことを踏まえ、辟雍会の人的ネットワークをもっと多様で確かなものにしていくことが次の課題だと思います。卒業生の中にはこの会の名前すらまだご存じない人が多いようですが、まずは、そういうところに声が届くようにして…。

**小澤** その卒業生についてですが、先生ご自身も永く歴史教室やアジア研究教室で学生を指導されてきました。教えてこられたご専門は？

**馬淵** 私の学芸大学在任中に学芸大学の卒業生の進路はずいぶん多様化しました。私は、社会科歴史教室を10年余り、教養系のアジア研究教室を20数年担当し、多くの学生たちとめぐり合いました。私の専門は朝鮮近現代史で、同じ分野の研究者として巣立った人たちも何人かいますが、やっぱり学芸大生の進路の主流は学校教員です。ただ、アジア研究では、出版・放送関係や公務員、情報産業、観光業、流通業、製造業など、さまざまな業種に就職した人も多く、こういう人たちにも辟雍会ネットワークに加わってもらって、学芸大学の教育環境を豊かにする支援事業ができればと考えています。

**小澤** これからの辟雍会をどのように盛り立てて行かれるのか、抱負をお聞かせください。

**馬淵** 今考えている第一の課題は、各県支部の増設だけでなく、辟雍会ネットワークを専攻・教室・クラス・サークルなどでも作っていくことです。それとともに、外部に誇れるような大学の環境づくりに協力していきたいですね。今期は「辟雍会奨学金」制度の創設、学内の桜の木の植え替え事業の推進、研究・サークル活動支援事業の具体化などを、大学側と相談しながら進めていきたいと考えています。現在、辟雍会の役員は全員無給のボランティアです。こうした貴重なボランティア精神に依拠しながら、持続性のある辟雍会活動の基盤整備をすることも重要です。そのために若い人々の活動参加を図るとともに、高齢化時代にふさわしい“熱意ある高齢者”の方々のお力を拝借する必要があります。ご協力のほど、どうかよろしく願いいたします。

**小澤** 本日は、どうもありがとうございました。

インタビュアー：辟雍会広報部長 小澤一郎

#### 馬淵貞利会長の経歴

- 1946 岐阜県本巣郡(現瑞穂市)に生まれる。
- 1976 一橋大学大学院博士課程を単位取得退学
- 1977 東京学芸大学に赴任
- 2004 東京学芸大学理事・副学長
- 2011 東京学芸大学退職

写真撮影：井上録郎 撮影日 7月26日(火)18:00(事務所)



## 支部便り



### 各支部の設立状況

番号	名称	設立年月日
1	青森県支部	2003.12.07(平成 15)
2	石川県支部	2005.07.02(平成 17)
3	富山県支部「獅子の会」	2005.08.22(平成 17)
4	岩手県支部	2005.10.01(平成 17)
5	千葉県(船橋)支部	2006.02.25(平成 18)
6	島根県支部	2006.10.01(平成 18)
7	高知県支部「高知辟雍会」	2007.06.24(平成 19)
8	北海道支部	2009.08.01(平成 21)
9	岡山県支部「岡山辟雍会」	2011.01.29(平成 23)
10	鳥取県支部	2011.02.27(平成 23)
11	静岡県支部	2011.03.26(平成 23)
12	新潟県支部	2011.08.28(平成 23)

番号	名称	設立年月日
13	広島県支部「広島辟雍会」	2011.10.30(平成 23)
14	神奈川県支部	2011.11.26(平成 23)
15	山梨県支部	2012.08.17(平成 24)
16	鹿児島県支部	2012.10.07(平成 24)
17	千葉県(船橋)支部	2013.07.27(平成 25)
18	群馬県支部「群馬辟雍会」	2013.10.26(平成 25)
19	佐賀県支部	2014.03.15(平成 26)
20	栃木県支部	2014.06.15(平成 26)
21	熊本県支部	2014.10.11(平成 26)
22	大分県支部	2014.11.08(平成 26)
23	埼玉県支部	2015.05.31(平成 27)
24	宮崎県支部	2016.02.20(平成 28)

## 鳥取県

「そろそろだっけ?」と気になっている頃、某先輩より「今年は西部の順番だって、よろしく頼むわあー」との連絡が入りました。「やっぱり」と冷や汗が流れるのが三年に一度の年の瀬の恒例となっています。鳥取県では、平成元年から毎年同窓会が開かれています。県を東部・中部・西部の三地区に分けての持ち回り開催です。

昨年度は、2月27日(土)に米子駅前の小料理屋さんに集いました。準備不足もあり15名でごちんまり。少人数ではありましたが、初めてお目にかかる先輩もおられて新たなご縁をいただくことができました。話の花が咲きお酒もずいぶん進み、有意義な時間になったのではと感じました。幹事としては懐が心配でした(笑)が、今年も襷を繋ぐことができ胸をなで下ろしました。

県内にはおそらく200名前後の同窓の方がいらっしゃると思います。県支部事務局に「日時、場所、会費」をお知らせすれば県内にお住まいの辟雍会の皆様に連絡が届く仕組みにはなっていないものの、なかなか重い腰が上がらず今回も反省すること頻り。さらに、記念写真を撮り損ねるという失態(写真がないのはその為です)もあり、かなり落ち込みました。今回は年に一度の同窓会の襷を繋ぐだけの活動となりましたが、次の西部開催時には学芸大ゆかりのゲストをお招きして少し賑やかな会を催したいと思っています。しっかりと準備を進め辟雍会鳥取県支部の「つながり力向上」に貢献できればと思っています。

(文：野口功 1992年卒)

## 栃木県

辟雍会栃木県支部活動状況

平成 28 年度栃木県支部総会及び懇親会（予定）

期日 平成 28 年 10 月 1 日（土） 18 時～ 20 時

場所 チサンホテル宇都宮（JR 宇都宮駅前）内 カフェ & バー サルーテ

会費 4,000 円（当日徴収）

出席は「はがき」または「E-Mail」で下記へご連絡ください。

はがき：〒326-0143 栃木県足利市葉鹿町 2040-2

柏瀬省五（カシワセシヨウゴ支部長宛）

E-Mail：shogoka@ca3.so-net.ne.jp

その他 5 月 28 日の辟雍会全国理事会で、小金井キャンパス内に「さくら」や全国の各県木の植樹が話題になり、栃木県支部としては、「県木：栃の木」を寄贈植樹します。（さくらの銘木苗も物色中、心当たりのある方、ご推奨連絡ください） また、東京学芸大学卒業後 栃木県内（分野不問）で活躍されている方、E-Mail（推奨）でご連絡ください。懇親を深めましょう。



栃木県支部立ち上げ総会 期日：2014.6.15 場所：日光高井家

## 岩手県

今年度、本県では希望郷いわて国体本大会が 10 月 1 日（土）北上市で行われる総合開会式を皮切りに 11 日（火）まで県内各地で開催されます。希望郷いわて大会は 10 月 22 日（土）から 24 日（月）までの 3 日間県内各地で開催されます。冬季競技を含めた完全国体を単独県として行い、東日本大震災津波の際に全国の皆様から頂いたご支援に感謝し、現在の復興状況をご覧いただくために着々と準備しております。学校関係者も延べ 25,000 人（生徒・教職員）が競技会役員・補助員に依頼され、大会成功に向けて全力で取り組んでいます。

全国の会員の皆様におかれましても、大自然に囲まれた本県にお越しいただき、三陸海岸の様子を実際に観て、体験いただければ幸いです。山の幸・海の幸に舌鼓を打ってください、お待ちしております。

さて、会員の皆様にマル秘情報がございます。本県の教員採用に関する耳寄りな情報です。数年前大都市圏で起きた大量退職者に対応するための教員採用増が本県でも起こるといった内容です。ずばりターゲットは小学校教諭です。本県出身の学大生のみならず、全国の優秀な教員志望の皆さん、来年の教員採用試験は岩手県で受験しませんか。素朴で純粋な児童・生徒と共に、未来の日本を背負って立つ人材をここ岩手から育ててみませんか。大都会で疲れ気味の現職教諭の方々も大歓迎です。

宣伝ばかりの近況報告になってしまって申し訳ありませんでした。岩手県支部の会員の皆さんは今年も元気です。



### 富山県

富山県の「獅子の会（辟雍会富山県支部）」は、昭和50年頃に、数名の仲間の不定期な集まりから始まったそうです。その後、平成2年に規約と名簿を作成して以来、26年間、毎年1回の総会・懇親会が主な活動です。現在、県内在住の名簿搭載者は約290名となっています。

本年度も8月20日に総会・懇親会を開催しました。23名の参加者を得て、盛大に開催することができました。会は、事務局からの簡単な諸連絡の後、すぐに懇親会です。参加者は年代もばらばらですが、サークルが同じだったり下宿が近所だったり、不思議なもので、同じ年代を同じキャンパスで過ごしたということだけで、

共通の話題が生まれ、旧知の間柄のように話が弾みます。大学の特性上、どうしても教員が多いのですが、この会では仕事の話は少なく、参加者全員が、あの日に戻れる貴重な場となっています。

会の締めくくりは、いつも参加者全員が輪になって歌う「若草もゆる」です。学生時代にはほとんど歌うことがなかったこの歌を、この会に参加することで覚えたという方もたくさんおられます。

私たちは、これからもこの会の絆を大切に、少しずつ仲間の輪を広げながら、末永く会を育てていきたいと思っています。



「獅子の会」の旗のもと

獅子の会（辟雍会富山県支部）  
事務局 草野 剛（平成2年国語科卒）

### 埼玉県

埼玉県支部は学芸大の卒業生のネットワークを確保し、会員相互の親睦を図り、地元はその力を還元していくという趣旨のもと、平成27年5月に会員33名で発足しました。初年度の活動は、準備不足のため総会とホームカミングデーへの参加だけという寂しい結果に終わってしまいました。

平成28年度は前年度の反省を踏まえて、総会時に講演会を開催しました。講師として前東京都教育委員会教育鑑・現明海大学副学長の「高野敬三先生」をお招きし、東京都の教育改革をアグレッシブな仕掛けと徹底した指導で実現された様子を伺うことができ、参加者一同感銘を受けました。講演会終了後の懇親会でも高野先生を囲んでより深いお話と、会員相互の情報交換により充実した総会・講演会とすることができました。

秋には研修会として、世界遺産の富岡製糸場見学とホームカミングデーへの参加を予定しています。

本年度の会員数は、多方面に働きかけた結果62名と増えてはいますが、東京都に隣接しているためか地元意識が希薄で、現役世代の会員、とりわけ若手の会員の確保と総会・研修会への参加者増が最大の課題となっています。今後は、睦み合える、参加して良かったと思って貰えるような総会・研修会・懇親会を企画していきたいと考えています。

辟雍会埼玉県支部 事務局長 阿部博之

## 千葉県

千葉県支部は、船橋市に在住または勤務する卒業生を中心とした団体です。

現在の会員は、船橋市が中心であるものの県内の教職員や学校管理職の方、県内で企業にお勤めの方、すでに退職され今でも教育に携わっている方など職種も年齢も様々になってきました。少しずつですが、会員の輪を広げ、市内から県内へと情報を伝達して会員数を増やそうと考えています。

昨年は、諸事情により定期総会懇親会を開催しませんでした。主な活動である定期総会懇親会では、会員の年齢差に関係なく、在学当時の思い出や卒業後から今日までの状況を交換しています。また、諸先輩からは、若手の会員の方々の悩みや将来に対するアドバイスもおこなっています。大学卒業後は、それぞれが社会に独り立ちしていくわけですが、将来に対する希望なども上司に相談する前にアドバイスをうけるといったケースも出てきました。

今年も秋に船橋市内で定期総会を予定していますので、多くの皆様の参加をお待ちしています。県内には、私たち千葉支部とは別に高校の管理職を中心とした先生方の団体もあります。こちらの入会希望の方も、この機関誌「辟雍」第13号をご覧になった千葉支部へ入会希望の学生諸君も、入会希望の方は下記の連絡先をお願いします。

千葉県支部事務局長 石井 康雄（現在 船橋市立金杉台小学校長）

自宅住所：船橋市前貝塚町 1010-18

電話番号：047-438-9380（自宅）

：047-448-3876（勤務先：金杉台小学校）

## 青森県

平成15年に第1号支部として発足し13年が経ちました。その間に正会員数は60名を超え、上は昭和28年卒の大先輩から下は今年卒業したばかりのかわいい後輩まで、年の差関係なく和気あいあいと活動しております。今年も1月に青森市にて懇親会、また8月に八戸市にて総会・懇親会を開催いたしました。懇親会では支部長あいさつの後に乾杯をしますが、青森県支部の慣例として、その日出席している一番若い会員が乾杯の発声をするというのがあります。これは支部として発足する前の「東京学芸大学青森県同窓会」の時から続いているものです。筆者が初めて会に参加した20代半ばの時、会場に着くと「慣例だから乾杯お願いね」と言われてとても焦った記憶があります。それ以降何年間も乾杯は私の役目となっておりましたが、若い会員が増えたおかげで現在は逆に乾杯をお願いする立場となりました。今回も卒業して2年目の後輩によるさわやかな乾杯の発声で懇親会がスタートしました。そして乾杯をした後輩は必ず「来年は必ず下を連れてきます！」と宣言します。これからも会員の輪を広げ、支部を発展させていきたいと考えております。



平成28年8月6日 八戸市にて行われた総会の様子

辟雍会青森県支部 事務局長 平成10年N類生涯スポーツ科卒 里村 輝

## 静岡県

静岡辟雍会は、辟雍会鷲山恭彦会長の呼びかけを機に、2011年3月26日に設立されました。東日本大震災から二週間ほどを経たころです。以来、毎夏、総会と講演会を開催しています。

今年の講演会は、本会創設に御尽力くださいました鷲山先生を講師にお願いし、「現代を生きる教養」と題し、御講演いただきました。教育行政の問題点を具体的に指摘しながら、現代を生きるために果たすべき「教養の在り方」に触れた思索に富んだお話しでした。東京学芸大学における国際、環境、地域、文化財といった専攻をもつ新課程の設立が大学をいかに活性化させたか。その25年の歴史を閉じることが何を意味しているのか。人文科学系の学問が軽視されつつある状況と現在の政治、社会、経済の状況に関連づけ、「現代に生きる教養」に収斂していく論理の展開と生々しい現実を鋭くえぐる迫力に眼を開かれ、心を打たれました。

静岡辟雍会の会員数は現在81名で、そのおよそ6割を現職の教員が占めています。しかし、総会並びに講演会に出席者の3分の2がすでに現役を退いた人々になっています。若い人にこうした講演を聴いてもらいたいというのが、出席者の多くの意見でした。若者をどう取り込んでいくかが今後の課題です。

辟雍会静岡県支部 事務局長 勝田敏勝



講演会のようす

## 石川県

東京学芸大学石川県人会が発足したのは、平成4年のことでした。それから2年に1度のペースで県都金沢市において懇親会を開催し、記念すべき10回目には30名を超える会員が集まりました。今年（平成28年）1月には、第11回の懇親会を開催することができました。参加者は22名と、記念の第10回よりは少なくなりましたが、常連のメンバーに加え、若い新メンバーの参加があったことはとてもうれしいことでした。私は、この回より、諸先輩からのご指名を受け第4代会長に就任することとなりました。現役の私のできることは、若い会員を集めることだと思っていますので、精一杯学芸大出身の後輩に声をかけ、益々の盛会をと張り切っているところです。

平成27年度は、石川県にとって大きな変革の年でありました。北陸新幹線が金沢まで開通し、静かなる古都が一転して小都会となったからです。懇親会での話題も新幹線のことを持ちきりでした。我が母校まで2時間半+中央線で行けるようになったので、懐かしの武蔵小金井まで足を運ぶ石川県人会メンバーも多くなるに違いありません。いくつになっても学生時代の思い出談義は楽しいもの。教員以外の職に就いた会員も含め、毎回大いに盛り上がっている東京学芸大学石川県人会（辟雍会石川県支部）です。ぜひ、皆様一度、北陸新幹線に乗って石川県にお越し下さい。ゲスト参加大歓迎です。

第4代会長 新村裕二（昭和58年A類国語選修卒）



## 佐賀県

支部人数は、現在は9名（2016年8月現在）です。構成メンバーは、学校教育関係者が4名、塾経営者1名、ICT教育機器関連会社1名、マスコミ（テレビ局）2名になります。

マスコミの方々は、県外への転勤が多いので毎年人数が変動することが、我が支部の特徴だと思います。活動は年に数回支部会を開催し、それぞれの業界の話題に花咲かせながら、佐賀の地酒を飲み交わしています。

昨年度は、マスコミに勤務している会員に、塾や学校の授業で特別講師として授業をしていただきました。テレビで見るアナウンサーに授業をしてもらった生徒たちは、思いの外緊張もせず、とても楽しい雰囲気、授業を聴いていました。NHKと民放、それぞれに勤務されているアナウンサーの夢の共演が、学校で実現しました。いろいろな業種が混ざった佐賀支部です。これからもいろいろな可能性に挑戦したいと思います。



辟雍会佐賀県支部 事務局長 小松原修

## 大分県

「地方からの発信」おんせん県おおいたは温かい心で繋がります。

辟雍会大分県支部（大分辟雍会）は平成26年11月8日に設立されてから今年で3年目を迎えることとなりました。昨年、11月21日に第2回総会を大分市内において開催し、15名の同窓生が各々の思い出を胸に参加・交流を深めることができました。

辟雍会本部からも昨年に引き続き、2名のご来賓として、元会長の長谷川貞夫先生と会長の馬淵貞利先生（当時副会長）をお迎えし、大学の現状や近況についてお話をいただくとともに、先生から講義を受けていたころの思い出話を花を咲かせることができました。

さらに、昨年からの再会の様子を振り返ったり、会員相互の近況を報告し合ったりすることで、親睦を深めることができました。

本年度、日田市から初めてご夫婦で参加された渡邊茂則・良枝ご夫妻は、同じ学科の同級生でもあり、大学時代のエピソードを聞きながら会員の皆さんと楽しいひと時を過ごすことができました。また、卒業して数年の若い会員の皆様も多数参加していただくことで、年代を越えた大学の様子を知る機会となりました。会員数も少しではありますが年々増加傾向にあり、本年度11月頃に予定されている第3回総会が今からとても楽しみです。

他支部の皆様も、是非「おんせん県おおいたの魅力」を発見していただきたいと思っておりますので、お越し下さい。



辟雍会大分県支部 会長 瀬口卓士（昭和63年A類社会選修卒）

## 宮崎県

平成 12 年に保健体育科 10 数名でスタートし、内地留学された方も交えて研修会や懇親会を十数年継続してきました。26 年からは全学科に声をかけ、28 年 2 月 20 日（土）宮崎市にて開催した第 3 回支部会は 30 名ほどの参加がありました。

自己紹介では、近況報告や「東大より芸があり、芸大より学がある」東京学芸大での刺激的なやんちゃ話を聞くことができました。また、つながりをいかした今後の発展を語り合うことができました。青春を謳歌した学生時代にタイムスリップし、充実した楽しい時間を過ごしました。

お開きの前に肩を組んで学生歌を歌い、記念写真撮影ののち、万歳三唱で締めくくりました。次回もまた、思い出に浸るひとときや新しい出会いが楽しみです。

今後は関係者の発掘や連絡の簡素化を図るとともに、縁のある方をお招きして、講演会を企画するなど、支部のさらなる発展に努めてまいります。

関係者名簿は 260 名ほどになり、メール・ショートメール・郵送にて案内をしております。届いていない方がいらっしゃいましたら、是非、事務局まで連絡方法をお知らせいただくとありがたいです。どうぞよろしくお願いいたします。

会 長 矢野 久紀（S40 甲保体卒）  
副 会 長 押方 修（S59A 数学卒）  
副 会 長 黒木 貴（S60A 社会卒）  
事務局 長 村中田 博（H7A 保体卒）宮崎市立清武小学校  
メール：hm110629@gmail.com まで



## 高知県

高知県内には 60 名程の学芸大出身者が在住し、年に 1 回程度懇親会を開催し親睦を深めております。懇親会の案内を郵送させてもらっておりますが、住所宛に届かず返送されるものが多くなりました。また、新しく高知で教員をされている方がいるとの話を聞きます。この「支部だより」のスペースを読まれた方は、是非連絡をいただきたいです。よろしくお願いいたします。

本年度は、12 月に実施します。堅苦しい会ではありません。和気あいあいとした和やかな懇親会です。是非参加して下さい。

支部長 宮地彌典（1973 年度卒 D 類保体科）  
TEL:090-5911-5088 メールアドレス：m-hirosuke@miyajigakuen.jp

副支部長 柚村 誠（1977 年度卒 D 類保体科）  
宇賀孝篤（1988 年度卒 A 類保体科）

事務局 中山泰志（1990 年度卒 D 類数学科）  
TEL:090-4976-9220 メールアドレス：k-kobun@titan.ocn.ne.jp

## 沿革

- 2003.11.03 (平成 15) 「辟雍会 (東京学芸大学全国同窓会)」 創立  
荒尾禎秀会長就任
- 2003.12.07 (平成 15) 青森県支部設立
- 2005.07.02 (平成 16) 石川県支部設立
- 2005.08.22 (平成 16) 富山県支部設立
- 2005.10.01 (平成 16) 岩手県支部設立
- 2006.02.25 (平成 18) 千葉県支部設立
- 2006.04.01 (平成 18) 荒尾禎秀会長再任 (2 期目)
- 2006.10.01 (平成 18) 島根県支部設立
- 2007.06.24 (平成 19) 高知県支部設立
- 2008.04.01 (平成 20) 長谷川貞夫会長就任
- 2009.08.01 (平成 21) 北海道支部設立
- 2009.10.31 (平成 21) 東京学芸大学創立 60 周年記念シンポジウムを本学と共催
- 2010.04.01 (平成 22) 鷲山恭彦会長就任
- 2011.01.29 (平成 23) 岡山県支部設立
- 2011.02.27 (平成 23) 鳥取県支部設立
- 2011.03.26 (平成 23) 静岡県支部設立
- 2011.08.28 (平成 23) 新潟県支部設立
- 2011.10.30 (平成 23) 広島県支部設立
- 2011.11.26 (平成 23) 神奈川県支部設立
- 2012.04.01 (平成 24) 鷲山恭彦会長再任 (2 期目)
- 2012.08.17 (平成 24) 山梨県支部設立
- 2012.10.07 (平成 24) 鹿児島県支部設立
- 2013.07.27 (平成 25) 群馬県支部設立
- 2013.08.11 (平成 25) 中国の留学生同窓会「東京学芸大学留学生北京聚会」開催
- 2013.10.26 (平成 25) 近畿支部設立
- 2013.11.02 (平成 25) 本会を「東京学芸大学辟雍会」と改称  
本会創立 10 周年記念祝賀会開催  
辟雍会創立 10 周年記念『辟雍』第 10 号発行
- 2014.03.15 (平成 26) 佐賀県支部設立
- 2014.04.01 (平成 26) 鷲山恭彦会長再任 (3 期目)
- 2014.06.15 (平成 26) 栃木県支部設立
- 2014.10.11 (平成 26) 熊本県支部設立
- 2014.11.08 (平成 26) 大分県支部設立
- 2015.05.31 (平成 27) 埼玉県支部設立
- 2016.02.20 (平成 28) 宮崎県支部設立
- 2016.04.01 (平成 28) 馬淵貞利会長就任



## 雑感「学大との出会い～その後」

辟雍会副会長 加藤正克

昭和40年4月、東京学芸大学甲類保健体育科入学、バスケットボール部に籍を置く。

体育科の学生として入学した以上、「部活動は学生生活の一部であり、スポーツを通してその特性や運動の楽しさを味わうとともに、練習の過程や技能の習得方法を学び、体育指導者としての資質・能力を高めることは大切である」という考えに異論はなかったが、次第に練習方法や内容に疑問を持つようになった。大学2年生のころである。

### ■ スキーとの出会い

部員の中で特に気の合ったN君・O君と雪の降るのを待ち構えて上越に向かった。私は全くの初心者だったので、お古の板(2メートル超)を貰い、よく転びながらも滑る・止まる・曲がるというスキーの楽しさ面白さにのめり込んでいった。

ここで学んだことは「自ら考え工夫すること」である。仲間は経験者なので、基礎的なことを教えてくれたが、自分たちはリフトに乗って滑ってくる間は『スキー教程』の写真を見て、ひたすら上り下りを繰り返し真似をするということを繰り返していた。また、仲間やインストラクターの滑りを見て「憧れ」や「目標」を持って取り組むことが苦ではなかった。そのお陰で2年目でバッジテスト1級に合格、4年目には準指導員の資格を取得することができた。余談だが、水泳も大学までカナヅチだった私が、5時間遠泳ができ都水連インストラクター資格もとれた。初心者指導のコツを学べたことに今も感謝している。

### ■ GSC＝一般運動クラブ設立

体育科出身教員として、児童・生徒に実技を教えるには、どの種目も示範を示せる技能を身に着ける必要があるのではないか。この理念の下、球技を中心に水泳・スキーなどのスポーツを季節に応じて行うクラブを前述の2人と立ち上げた。大学3年の時である。体育科運動部員からはなかなか理解は得られなかったが、後に学長となられた関四郎先生が「教育大にも同様なクラブがあった」と快く顧問を引き受けてくださったことが何よりの励みであった。部員が集まらない中、歴代の部長・部員の努力の御蔭で半世紀近く経った今も存続していることを感謝し誇りに思うこの頃である。

## ■ 教諭～校長時代

新採教員として体育指導に力を入れるとともに、バスケ・バレー・テニス・卓球など教員の学校対抗や都大会で活躍する機会に恵まれた。2校目で東京都研究員(体育)を経験して、実践と理論の大切さを痛感させられた。もっと研究したいという思いで立ち上げたのが『板橋体育を語る会』である。その時会長を受けていただいたのはN校長・H校長等であり、いずれも学大の先輩で大変お世話になった。毎月1回18時から2時間、実践報告・提案を基に参加者が自由に思いを語り合い、また実践を通して結果を報告し合うという活動が13年間も続いた。会が終わってからの居酒屋Oでの語り合いは更に熱いものがあった。会員は多いときで150名ほどいた。その時の若手がその後、各区市で活躍したことは言うまでもない。これも学大出身者の協力あつてのことである。



## ■ 体育・同窓会に関わって

30歳代半ばから管理職受験の研修会に参加し、当時大多数であった学大OB校長のお世話になり、校長・指導室長・教育委員長職を経験することができた。体育関係では、東京都小学校体育研究会顧問・日本学校体育研究連合会参与として、学び続ける機会を得ている。学大出身としては、社団法人東京学芸大学同窓会理事長という大役も経験させていただいた。全国同窓会『辟雍会』とは立ち上げの時から関わらせていただき、現在も副会長として会に参画できることをありがたいと思っている。

※私は現在、認定こども園の園長を務めている。H校長の教え「誠実」「謙虚」「感謝」を忘れず、学大出身である誇りをもって、乳幼児教育及び後輩の育成に努めていきたい。



## 「大学時代の学び」を活かし 「おおいたの教育」として発信し続けたい

大分県豊後高田市立三浦小学校 校長 瀬口卓士

『学びの21世紀塾』この取組を耳にされたことはないでしょうか。ある大手新聞社の解説では、「豊後高田市の市営塾。土曜の奇数週にある『寺子屋講座』が柱で、公共施設や小学校などを会場に、5歳児から中学生までの約千人が算数・数学、英語・英会話、パソコンなどを学ぶ。市内の対象年齢の子の約6割が参加している。講師は市民65人を含む約80人。受け付け業務などのボランティアには教諭約160人を含む約200人が登録。土曜の偶数週には太鼓教室やカヌー教室など『わくわく体験活動』も実施している。」と記されています。私は、この市(まち)をあげての教育実践をとおして、学芸大で学ばせていただいた「教育のめざす方向性と意義の大切さ」を再確認することができたのです。

大学を卒業して教職に就いたのが今から26年前、縁あって居住地に隣接する豊後高田市内の小学校でした。当時から小さな市でしたが、教育にける思いは県内のどの市町村よりも強かったことを覚えています。常に現場での教育実践の積み重ねを行う中で、私はよく本学の学生歌である「若草もゆる」の歌詞「自由を守り 真理を究む 獅子の星座の旗のもと 希望輝く」という一節を思い浮かべ、「子どもにとって教育ができることは何か」を考えてきました。それから、16年後に教育行政で生徒指導に携わらせていただく機会を得て、さらにその2年後には、豊後高田市教委の指導主事となりました。その時は一人配置の指導主事で、幼稚園から中学校、社会体育まで市内全ての教育課題に向き合うことができました。課長職3年を含め7年間で、教職以外の経験を多く踏ませていただきました。

市は合併という大きな節目を経て、新たな改革のスタートを切ったばかりで先見力のある市長や教育長の「市の発展を教育に馳せる」を視野に入れた事業展開には、驚くことばかりでしたが、今では『昭和の町』をブランドに全国各地から多くの観光客が訪れていただける町、「住みたい田舎」ベストランキングの町として生まれ変わりました。そんなまちづくり推進にどうしても欠かせないツールが「子育て」と「教育」でした。14年前、ゆとり教育の要因の一つとされている完全学校週5日制が導入され、その危惧される課題として「教育格差」や「教育力の低下」にいち早く対応させるために「昭和の町は教育のまちです」をキャッチコピーに掲げ、定住促進の事業とリンクさせながら教育改革を遂行していきました。『学びの21世紀塾』開始3年後にスタッフとして関わる中で、「なぜ、土曜日までも子どもに教育をするの」の問いを



にぎわいの「昭和の町」のボンネットバス



「学びの21世紀塾」で学ぶ子どもたちの様子

いただくことが 本当にとくさんありました。開設以来 10 年経って、その問いの答えは、明確になりました。全国各地の報道や教育行政機関、議会関係者の方々が遠路はるばる視察・訪問していただけるようになり、平成 25 年には、下村文部科学大臣の視察を受け、「土曜日授業」の在り方の地域教育型モデルとして取り上げられました。

平成 15 年度に大分県が初めて実施した学力テストで、県内 23 市町村のうち 22 番目でしたが、18 年度から 10 年連続でトップクラスを維持しています。行政や学校、そして教員が「本気」になれば、その熱意は地域住民や保護者、そして子どもたちにも伝わる。その「本気」になる経験を私は大学生活で得ることができました。学習では日本近世史学と社会教育学に熱中し、運動では弓道に邁進したことが今活かされているとつくづく感じます。

今まで述べさせていただいたこの塾の取組はあくまでも学校の授業を補完するものであり、その支えになる学校は、それ以上に研究や研鑽を重ね成長してきたものと確信しています。

現在、私が勤務している学校も小規模の学校ではありますが、大分県初めての英語教育導入校であり、コミュニティ・スクールでもあります。これからも引き続き先見性をもって、目の前の子どもたちの無限大の力を伸ばし続けたいと願っています。

また、本年度から辟雍会の理事をさせていただくようになり、微力ですが多くの卒業生の方々に学芸大の魅力を伝えたり、地域で活躍する卒業生の思いをつなげたりする「架け橋」となりたいと思います。

1988 年(昭和 63 年)卒業 A 類社会選修



## 自由で包容力のある学芸大学の教育

有限会社メファ・マネジメント代表  
医療法人メファ仁愛会 経営管理長 中山嘉人

### ■ 試行錯誤の学生生活

平成元年、私は国際文化教育課程アジア研究専攻の2期生として学芸大学に入学しました。ちょうど大学の入試改革が行われた直後です。当時を振り返ると、大学の先生がたはもちろん、私たち学生も、日々悩みながら、手探りで進んでいたように思います。私自身、「将来は発展途上国といわれる地域で仕事をしたい」と希望を持ちながらも、一体何から身につけていいのか、暗中模索だったことを憶えています。

そうはいつでも、大学では本当に自由な環境で学ばせていただきました。教養系ということもあり、私たちは、教育分野だけでなく、経済学や社会学、歴史学や文化人類学など各々の興味にまかせて学んでいました。そういう学生の様子を、先生がたはおおらかな気持ちで温かく見守ってくださっていたように思います。

### ■ 国際協力の現場で

その後、私は大学を卒業後すぐに青年海外協力隊として、南部アフリカのザンビアへ赴きました。2年間、現地の政府系中高等学校で、日本の中学2年生から高校3年生に相当する学年の数学を担当しました。電気や水の不自由な生活を現地の先生たちや村の人々、そして生徒たちと共に過ごしました。

そこでは、教育を取り巻く社会環境の整備が学校教育の前提だということを実感しました。まず平和で安定した国の政治や経済の仕組み、そして、水や電気を安定供給できる社会インフラが必要です。水や電気が数週間止まると学校も休校になり、生徒は水汲みに駆り出されます。さらに、安定した国家経済、家計の支えがなければ、保護者は学費や交通費を賄えません。教育資金が足りないため、生徒は始業日までに学校に集まることができず、授業がカリキュラムどおり行うことができないことも慢性的な問題でした。また、HIV/AIDSやマラリアなどの感染症、公衆衛生も大きな課題です。

このように学校教育が成り立つためには、様々なことが相互に絡み合っており、学校の現場レベルでは解決の糸口が見えなくなることもあり、苦い経験になりました。

その後15年あまりの間、アフリカの現場、日本、そして英国の大学院の間

を、すなわち、国際協力の現場と政策、そして研究の間を行き来してきました。その間、技術協力専門家として教育政策の立案やドナー間の援助調整、そして、教員や行政官のトレーニング、カリキュラム開発支援のプロジェクトなどに関わってきました。

一方、国際協力において、現場レベルでは関係者の利害が様々な場面で衝突したり、政策レベルでは、援助国、被援助国間の思惑が働いたり、微妙なバランスの中で、物事が進められています。その中で、教育や医療など社会開発の分野においては特に、正解のない課題に取り組む複眼的かつ長期的な視野はもちろん、立場や利害を乗り越える自由な発想とバランス感覚が必要だと感じてきました。こうした姿勢の基礎に、学芸大学での自由かつ学際的な学びがあったのです。



### ■ 高まる学芸大学の学びの重要性

7年前、私は日本に帰国し、社会人教育や組織経営に関わるようになりました。家事や子育て、介護など家族の中での役割も担っています。環境はこれまでとずいぶん変わりましたが、やはり必要なのは、与えられたその場で役割を担い切る自由で柔軟な考え方だと感じています。

わたし個人の生活の変化だけでなく、世界を広く見渡すと、今、日本だけでなく世界の様々な地域において、国のあり方、社会制度、そして私たち一人一人の生き方が大きな「曲がり角」を迎えているのではないのでしょうか。

このような時代だからこそ、学芸大学が有する自由で包容力のある学びの重要性は、世界のどの社会においても通用し、その役割はますます高まっているのではないかと思うのです。

1994年(平成6年)卒業 K類アジア研究専攻



## 「鉄道の旅を楽しむ、インドネシア在勤」

在スラバヤ日本国総領事館 首席領事 古賀俊行

私が現在勤務するインドネシアの地を初めて踏んだのは、2003年1月でした。学芸大を卒業後外務省に入省、主に経済協力を担当しつつ、西アフリカ・ナイジェリアにおける在勤を終え、独立直後の東ティモール在勤を命ぜられたのですが、当時の在東ティモール大使館は在インドネシア大使館の兼勤事務所という扱いで、現地に1か月出張勤務後、ジャカルタに戻るといった体制をとっていました。

独立騒乱直後の復興過程にある東ティモールでの勤務は、担当する多くの経済協力プロジェクトが動いていることもあり週末も休む暇がない程多忙でしたが、村落給水、基礎教育、港湾修復、発電等自ら関わった案件が次々進み、この国の再出発に参加できることは、大変やりがいのあるものでした。

他方で出張の合間にジャカルタに戻った際、新しい楽しみを見つけることが出来ました。

東西5千キロに及ぶ広大な国土と2億4千万の人口を抱えるこの国には、かつてオランダ領東インド（蘭印）と呼ばれていた時代に敷設された約4千キロの鉄道網が広がり、毎日多くの列車が庶民の足として走り回っています。

70年代以降に円借款で整備されたジャカルタ近郊の電鉄区間では、90年代後半のアジア経済危機のあおりで老朽化した車両の代替が困難だったところ、ジャカルタと東京の姉妹都市の縁で、都営地下鉄三田線で使用されていた中古の電車が無償譲渡され、この JABODETABEK と呼ばれる首都圏で初めての冷房付きの通勤電車サービスが開始されたところでした。着任直後、ジャカルタ市内の高架線を、見慣れた東京の電車が走る姿を目にして大変驚いたのを今でも覚えています。

私は元来の汽車好きで、ここぞとばかりに機会を捉えてこの鉄道を使って小旅行を楽しむようになりました。近代化・画一化が進んだ日本の鉄道からは消え去って久しい旅情・昔ながらの鉄道の情景がそこにあり、我々日本人が思い浮かべるイメージそのままの南国の風景が車窓に広がっていました。

蘭印時代にプランテーション開拓されたジャワ島の精糖工場を訪問すれば、古い蒸気機関車が100年前と変わらぬ姿で今なお現役で働いていました（残念ながら現在では殆ど姿を消してしまいました）。

更に、国鉄の幹線では近代化が進められる中、古い鉄道関連の文化財を大切に保存していこうという人達がおり、またSNSでは多くの鉄道好きな地元若者達が活発な情報交換を行い、鉄道趣味というのは欧米など先進国に



蘭印時代に作られた古い鉄橋を渡り、ジャカルタからバンドゥンを目指す特急列車。



ジャカルタ市内のイステクリル・モスク前を走る、元JR東日本の中古電車。



サトウキビ畑へ向かって走る、東ジャワの製糖工場の古い蒸気機関車。

しか存在しないものだと思っていた自分にとっては大きな驚きで、少しずつインドネシア語を学びながら、こういった地元の同好の人達とも交流することが出来ました。

その後一旦東京に戻り6年間の本省勤務の後、2010年にジャカルタの大使館に赴任、12年に同じジャワ島内のスラバヤ総領事館に転勤になり、現在まで6年間インドネシアで暮らし、そして鉄道の旅を楽しむ機会を得ました。一昨年にはこの間の経験を『インドネシア鉄道の旅』(潮書房光人社)として上梓する機会にも恵まれました。

途上国の鉄道といえば、汚い、遅れる、危険といったイメージから、在留邦人や邦人旅行者の方々はこれを敬遠していた向きも多かったところですが、初めてインドネシアの地を踏んでから14年弱、当国における鉄道のハード・ソフト両面での改善は著しく、実際に乗ってみると案外快適、また汽車旅をしたいという方の声も多く耳にします。現在 JABODETABEK 電鉄区間を走る電車の95%以上は日本からの送られた中古の冷房電車が占めるようになりました。今や別世界です。

最近日本の若者は内籠り、海外へ出たがらないという話を最近よく耳にします。学芸大OBの皆さんは、教育大学というその特性上、国内で職場を見つける方が多いかと思いますが、国際系を中心に在外勤務をされている方々もいらっしゃるかと承知しています。また、私は当地の日本人学校で勤務する教員の方々ともお付き合いさせていただいていますが、皆さんそれぞれに当地生活を楽しんでおられるようです。

どんな国であっても、自ら活動の範囲を広げていけば、その土地に応じたより多くの楽しみを見つけることが出来ると思います。皆さんもし機会がありましたら、是非在外生活を選んでみませんか。

1995年(平成7年)卒業 K類アジア研究専攻

※古賀さんは2016年10月から在ミャンマー日本大使館勤務に異動されました。



## 「中堅」としての格闘の日々

成城学園中学校高等学校教諭 皆川一弘

今年、49歳。学芸大で学部・大学院と過ごしてから早25年、現在の職場に就職してまもなく四半世紀になります。職場では「中堅」と呼ばれる世代となり、学校運営・学校改革の中心として実働部隊を任される年齢になりました。

私立学校を取り巻く経営状況は厳しいものがあります。この8年間、私は担任を離れ、学校の広報を担当する総務部と、新校舎建設に関わる専門部会の任に就き、教師というよりはむしろ学校経営、生徒募集、渉外・営業といった内容の仕事を担当しています。授業はこれまでの蓄積をもとに、仕事の合間に上手くこなしている状況…。ふと「このままでいいのか？」と思うことしばしばです。「担任をしたい」「教材研究をもっとしたい」と思うこともありますが、今の自分が置かれた立場も「中堅」世代が背負わなければならない責務と思い、むしろ楽しんで仕事をしようと日々過ごしています。

私が勤務する成城学園は、大正時代の自由教育の先駆者・澤柳政太郎が創立した学園で、来たる2017年には創立100周年の節目を迎えます。いわゆる「名門」の部類に入る学校かもしれませんが、私学間の競争の波は次から次へと押し寄せてきます。校風や理念といった価値よりも「偏差値」で選ばれる昨今の中高受験において、毎年のように、受験生の数と、塾業界が発表する合格者偏差値に振り回されています。広報の仕事には6年間関わりましたが、たまたま同期で就職した同じ学芸大出身の良き相棒との二人三脚で、奮闘してきました。相棒である彼女は北海道出身、私は岩手県出身ということで、「地方出身、国立大学出の二人が、縁もゆかりもなかった東京の私学の将来を支える仕事しているなんて面白いね」といいながら、学校の未来のために仕事をしています。学校改革はまだまだ道半ばですが、今は相棒の彼女が広報活動の先頭に立って頑張っています。

その学校改革の中で登場してきたのが「新校舎」の建設。私は、学園法人が組織した新校舎建設に関わる専門部会の教員の代表のひとりとして、その重責を担うことになりました。校舎をつくる、なんていう経験は誰も持っていません。新校舎の建設には4年半の月日を費やしましたが、学園としての教育活動のコンセプトを見定めてそれをどう校舎に生かすか、といった議論から始まり、法人執行部や設計会社と多くの議論を重ねました。その新校舎には「次の100年、いわゆる第2世紀の教育に耐える校舎」であることが求められ、半ば手探りで、かつ、壮大なビジョンを描きながらの作業となりました。キーワードとしては、「アクティブラーニング」だとか「ICTの活用」だと



完成した成城学園中高新校舎

か、「英語によるコミュニケーション力」だとか、どれもそれ自体手探りなことばが並びます。

建物や設備をつくってもそこで仕事をするのは旧来の殻からなかなか抜け出せない教師集団です。ハード面が先に仕上がってしまった今、そうしたソフト面の意識改革は後手に回ってしまい、先生方は理念を具現化した箱物と、現実の授業や生徒対応との間でもがいているといったところです。そうした教員集団の意識改革をリードするのもわれわれ「中堅」世代。ここが踏み張りどころなのでしょう。

同窓会長になられた恩師である馬淵貞利先生も、ずっと大学改革に関わってこられたとうかがっています。同じような立場、同じ世代にいる同窓生の皆様にエールを送りつつ、「みんなも頑張っているんだから」と自らを鼓舞していただきたい、そう思います。

1992年(平成4年)修了 大学院修士課程社会科教育専攻



## 学校の立て直し

日野市立大坂上中学校校長 高橋清吾

平成 25 年 4 月 1 日付で校長に昇任し、期待と不安で大坂上中学校に赴任した。春休み中であつたが、生徒用靴箱の破壊を先生たちや用務主事さんと直す作業から、私の学校の立て直しが始まった。しかし、それはほんの序の口で、学校を安定させるまで疾風怒濤の 1 年間を送ることになった。日常的に、授業中の私語、他クラスへの侵入。廊下の水浸し。トイレの破壊。教室や廊下の天井に穴。爆竹を廊下で鳴らす。牛乳瓶、トイレットペーパー、石鹸等を上から投げ落とす。60 機の紙飛行機が舞い、アメの包み紙と吐き捨てたガムがあちこちに。紙屑だらけの教室、すだれ状態のカーテン。壊された掃除用具入れ。喫煙、隣の高校生の制服にツバを上からかける。防火扉をける音が響き、窓ガラスを割ることが頻繁におこる。注意指導する教員、校長にもかまわず、「死ね」、「うるせい」と暴言の嵐。注意指導する数名の教員に徒党を組んで取り囲み、注意を遮り、俺たちの言う事を聞いてくれないとわめいて、激昂した生徒が扉のガラスをたたき割る。指導で気に食わないと会議中であろうと、校長室に来客がいようとこままわず乗り込む。その上、武蔵村山市の全中学校とのケンカ、自動販売機の破壊、万引き等学校外での問題行動。

教員がすっかり乗り越えられ、生徒が勝手気ままに振舞うことが常態化したこの学校を立て直すために、私が取り組んだことは、①委縮した教員の士気を高めるために身をもって指導に当たる。②学校の実態を保護者、地域に知ってもらい、保護者と地域が本気になってもらう。③教員と生徒との関係を作るために学級経営の研修を行う。④二者面談、三者面談を多く行い、生徒の気持ちをくみ取る機会を作るなどであった。

①については、物音がすると真っ先に校長室から飛び出し、現場に入り指導した。このことの積み重ねで教員が生徒の前に出て注意指導するようになった。②は荒れの中心の 2 学年教員を集め、事前に PTA 総会ですべて学校の状況を明らかにし、期間限定の保護者の授業見回りを行うと宣言した。生徒のひどさより、教員の指導力を問題視して、教員批判へと向う恐れがあつたからである。実際、PTA 2 学年会には 2 学期半ばまで私が出て協力依頼し、学年委員さんと一体となって活動を行った。最後には全員参加の臨時 2 学年保護者会も設定し、実際見た親の感想や意見を話させた。最初は学校の指導や学校に来てもらうことに批判的な親もいたが、「私だったら仕事の途中で学校からの連絡が入れば行く」という意見が相次ぎ、子どもを良くするの

は親の務めという雰囲気作り上げられた。親が本気になって子どもと向き合い学校の指導に協力的になったことが学校を立て直す大きな要因となった。加えて地域の方の協力も大きく、評議員の地元駐在の警察官も見回りから、指導と労を惜しまず取り組んでくれた。

③については、夏休みに校内研修を実施した。学級経営の基本は安心できる規律ある空間を作ることという経験に裏打ちされた講師の話は教員に見通しと意識の変化をもたらし、その後の職員会議で、ある先生が「2学期からは全員でチャイムと同時に授業を始め、あいさつと教室をきれいに。」と呼びかけ、全員で取り組む雰囲気と意思統一が図られた。④は普通の生徒に対し教員がじっくり話すことで、普通の生徒を安定させ集団の雰囲気を作りあげることになった。私自身も問題行動の生徒を保護者に連れてきてもらい一人一人にじっくりと話し、親にも学校の指導の理解を図った。その後、一人一人に暑中見舞いという形で励ましの言葉を送って心の成長を図った。これらの積み重ねで、その年度の終わりの2月には普通に授業ができるようになった。学校の立て直しには、教員はもちろんであるが、親も地域も本気で学校と一体となって生徒の育成にあたることがいかに大切かを実感した1年であった。

1984年(昭和59年)卒業 A類社会科



## 「噴水広場の今・昔」

元職員 井上録郎

2016年8月、久しぶりに大学を訪れたら、噴水広場はウッドデッキの広場になっていました。広場の隣の附属図書館には通称 "note cafe" が併設され、学内の方々のみならず、子どもづれの近隣の方々にも大いに利用されている様子でした。地域の保育園の子ども達や小学生が虫取り・セミ取りに来るキャンパスで有ってほしいという思いと共に、かつて噴水広場であった頃の記憶も懐かしく、思い出の風景のいくつかを回想してみました。

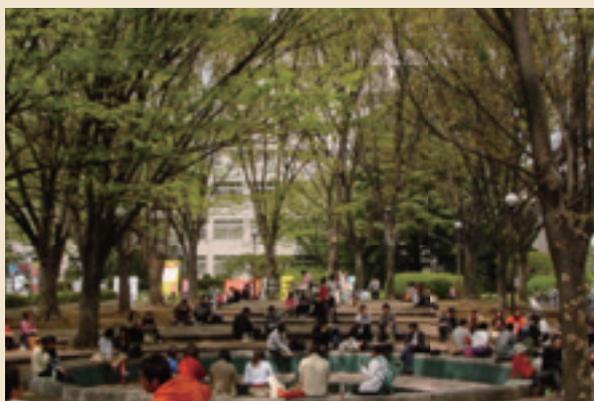


私が就職した1972年、大学の正門を入ると目の前に大きな櫟群があり、その広場には円形の池と噴水がありました。そもそもこの噴水池は、大学の統合記念事業で1965年4月に憩いの小公園として整備されたもので、以後、学芸大学中央庭園といわれてきました。これは1968年冬に撮影されたもので、以来、学生たちの憩いの場となりました。当時は、櫟の木はまだほっそりと小さく閑散とした風景でした。構内では旧陸軍の兵舎を木造校舎として使用していたような状態でした。こ



の噴水池はキャンパスイメージが少しずつ造形されていくひとつの象徴だったのででしょうか。

噴水池周辺では毎年、4月になると新入生が生協主催のバレーボール大会に参加するため昼休みに練習する姿や、新しい友達と誘い合い昼食を楽しむように食べる風景などが毎日見られました。教員養成大学のキャンパスに相応しい風景でした。この写真は、2001年4月17日の昼の噴水池の風景です。



例年夏になると、この広場で学生主催の「サマーコンサート」が開かれました。若さ溢れる音楽にのせて多くの学生達の踊る姿を眺めて楽しんだ時間も思い出します。この写真は、学生たちがこの広場を清掃し、舞台を作り雰囲気盛り上げている開催前の様子を2004年7月1日に撮影したものです。



## 「飯島同窓会館由来記」

現在、辟雍会の事務所は「20周年記念飯島同窓会館」の2階にある。この建物は1969年、学芸大学の創立20周年を記念して建てられたもので、以来、学内では「20周年記念会館」と呼ばれてきた。それが上記のように名称を変更したのは鷺山前会長が学長時代のことである。ここでは、その経緯を簡単に記しておきたい。

「20周年記念会館」は、国費ではなく、多くの関係者の努力で学芸大学のキャンパス内に建設された稀有な建物である。特に資金面でこの事業を支えてくださったのがヤマザキ製パンの社長・飯島藤十郎氏で、同氏は学芸大学の前身の一つである豊島師範の卒業生として協力を惜しまれなかった。

2008年、鷺山学長の時代に、この建物の耐震補強等の改修工事を行うことになったが、法人化した大学がこの改修経費を新たに工面することは至難の業であった。「窮すれば通ず」とはこういうことを言うのであろうか。「20周年記念会館」の建設当時の事情を調べていると、上記のいきさつが明らかになった。

そこで、もう一度飯島さんに相談してみようということになり、鷺山学長と当時総務・財務担当理事をしていた私は、飯島氏の未亡人・和さんのところに相談に行った。私たちの説明に静かに耳を傾けておられた和さんは、快く必要経費の全額を寄付してくださった。

こうして「20周年記念会館」の改修が終わったのは2008年5月31日のことで、改修後の会館名は飯島さんを偲んで「飯島同窓会館」とすること



とした。また、改修費の一部を割いて会館横の庭を整備し、枯山水の日本庭園を造った。この庭園の石は、小金井市の造園業者の三上さん(当時、大学の環境整備のチューターをお願いしていた)が滋賀県の旧家から運んで来られたものである。この庭園は「飯島和庭園」と命名して今日に至っている。写真はその改修工事と庭園の完成を祝して開かれた茶会の光景である(2008年7月)。

馬淵貞利 記

## 平成 28 年度 各部活動報告

### ■ 現総務部

総務部は次の六項目を柱に、全体的な連絡調整を行っています。

- 1 全国代表者会議、理事会、幹事会等の開催
- 2 東京学芸大学との連絡・調整の実施
- 3 既存の卒業生組織等との交流（総会・新年会等）
- 4 新規会員の入会手続き及び名簿管理業務等
- 5 機関誌、予算書、決算書、事業計画等の発送
- 6 規則等の整備・見直し

設立から 10 年以上が経過しました。総務部では、会員の皆さまとの連携強化、新規会費納入者の獲得、会則及び規則の見直し等、日々努力を重ねております。

（総務部長 佐藤 守）

### ■ 会計部

会計部は予算の作成及び執行を中心に次の活動を行っています。

- 1 平成 28 年度予算の計画
- 2 予算の適正かつ効率的な執行
- 3 的確な会計事務の実施

（会計部長 佐藤節夫）

### ■ 広報部

広報部は次の3つを中心に活動しています。

- 1 機関誌『辟雍』第 13 号の発行
- 2 ホームページの管理と充実
- 3 広報リーフレットの作成

1 は機関誌です。2 のホームページは随時更新しています。広報用のリーフレットは今年度版を作成します。

（広報部長 小澤一郎）

### ■ 組織部

昨年度に引き続き、会の組織拡大に努めています。

- ① 支部設立事業  
昨年度に宮崎県支部が設立され、今年度は他県においても支部設立の動きがあります。
- ② 未加入者への入会依頼  
未加入の新入生や学生、卒業生への加入を勧めています。
- ③ 学生委員との交流授業  
昨年は、ホームカミングデーに合わせて開催しましたが、今年度は検討中です。
- ④ 既存支部の総会、会合等への出席  
各支部の会に積極的に出席しています。
- ⑤ 卒業・修了予定学生への配布物作成  
昨年に引き続き、「卒業生・修了生のみなさんへ」（既存支部紹介）という案内パンフレットを配布するとともに、記念品（辟雍会の名称入りボールペン）を贈呈する予定です。

（組織部長 二宮修治）

## ■ 事業部

事業部は次の活動を行っています。特に 11 月 5 日(土)開催のホームカミングデーのイベントに於いて、本学卒業のNHK気象キャスターの平井信行氏をお招きして、昨今の異常気象の話題などの講演を行います。

- 1 学生のキャリア支援事業
  - 企業就職対策講座 「かち就(10回開催予定)」
- 2 会員支援事業
  - 法律ゼミ
  - 協賛事業「X(クロス)」
  - 学生企画事業の支援
- 3 ホームカミングデー主催事業
  - 平井信行氏講演会「最近の気象災害～台風、大雨」
- 4 キャンパス環境充実支援事業
  - 支部協賛による、ご当地桜・県木の苗木植樹
- 5 アマチュア無線記念局の設立(ネットワークにより辟雍会の広報を拡散できる。)

(事業部長 荒川悦雄)

## あしがき

『辟雍』第 13 号をお届けします。今号は4月より新しく会長に就任した馬淵貞利会長へのインタビュー、加藤正克副会長の自己紹介を兼ねた記事が載りました。また、今回は海外で活躍する会員の声も届いています。そして各支部からの声もたくさん届きました。編集協力者の井上録郎さん(広報部員)からは記事と写真の提供がありました。本会の活動は、この機関誌とホームページによって紹介しています。本誌やホームページを通じて会員相互のつながりが深まることを願っています。

(小澤一郎)



発行人	馬淵貞利
編集人	小澤一郎
編集協力	井上録郎
デザイン	門馬 純
印刷所	(有) サンプロセス

東京学芸大学辟雍会

〒184-8501

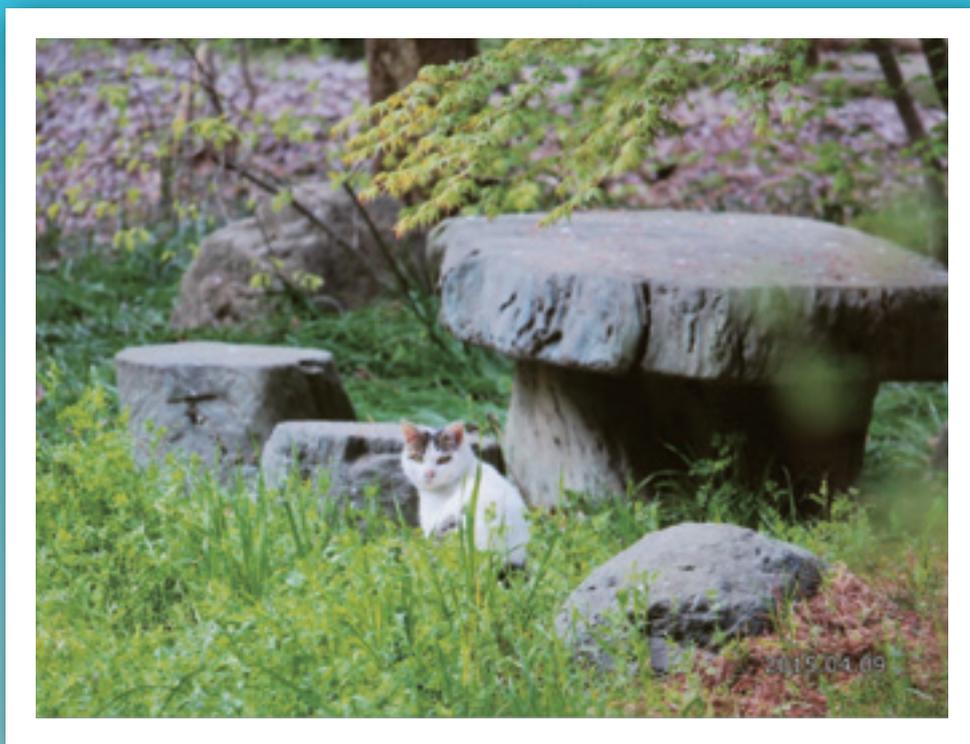
東京都小金井市貫井北町 4-1-1

20 周年記念飯島同窓会館 2 階

TEL/FAX 042-321-8820

E-Mail [hekiyou@u-gakugei.ac.jp](mailto:hekiyou@u-gakugei.ac.jp)

ホームページ [www.hekiyou.com](http://www.hekiyou.com)



学士ネコ「ズーちゃん」

ウェブサイトや機関誌「辟雍」へのご意見・ご感想もお待ちしています。

辟雍 第13号 東京学芸大学 辟雍会機関誌  
Copyright © 2016 Hekiyoukai All Rights Reserved.

